
愛じゃなくて

なぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛じゃなくて

【Nコード】

N6266B

【作者名】

なぎ

【あらすじ】

彼の何が好きかと問われれば、一秒の間すら置くことなく、顔だよと答えるだろう。考え方とか、性格だとか。そんなものは必要ない。

みんなが言う、イケナイコトは。こんなにもあたしを満たしていい。

愛じゃなくて

彼の何が好きかと問われれば、一秒の間すら置くことなく、顔だよと答えるだろう。考え方とか、性格だとか。そんなものは必要ない。

机ひとつを挟んだ向こう側で、伏せられた睫毛の動きにさえも心が躍る。耳に少しだけかかったあの黒髪や、張りのある頬はどんな感触なんだろうか。そんなことばかり、考えている。

「南、手が動いてないぞ」

薄めの唇に見とれていると、それが動いてあたしの名を呼んだ。ハッ和我に返る。その隙間から綺麗な歯を見せて、城川さんは、何見てんだよ、と茶化すように笑った。

ダメだ、やっぱり好き。その輪郭も、眉の太さや瞳の色までも。全てにおいて、あたしの理想を写しおこしたような顔。視界に入るだけで、胸が騒ぎ出す。

「別に見てなんかいいです。城川さんこそ、手、止まってますよ？」

平然を装って、むしろ冷たさすら含ませながら視線を落として言

った。はいはい、とあしらうように苦笑いしてから、彼はパソコンに向き直り、また長い睫毛を伏せていた。

器用にキーボードを叩く長い指が、再びあたしの心をかき回す。左薬指のリングが、オフィスの電灯に照らされて、心なしか眩しい。あれと対になったリングを持つ女性の前で、城川さんはどんな笑顔を見せるのだろうか。

疲れた身体に溜め息を漏らしながら、玄関の扉に手をかけた。見慣れた大きなスニーカーがすぐさま目に映る。リビングの方から微かに聞こえるテレビの音と、香ばしい食欲を誘う香り。そうか、今日は金曜日だ。

「ただいま、来てたんだね」

頬が緩む感覚を自覚しながら、纏っていたコートを脱いで、キッチンに立つ広い背中に話しかける。テーブルにきちんと並べられた二人分の食器に、愛しさを隠せない。

「おかえり。菜々子、腹減ってる？　ちなみに俺はぺこぺこだけど」

満面の笑みで振り返った潤に、同じように笑顔を向けて、あたしも、と返す。八重歯を見せながらさらに笑う潤の表情は、いつもながらあたしの疲れを癒してくれる。この二年間で、潤はすっかりあたしの安定剤のような存在になっていた。

潤が訪れる週末は、他には代えがたい安心をあたしにもたらしてくれる。飾らなくて良い、気を遣うことも無い。心地よくて、少しでも少し物足りない。いつからか、週末を指折り数えて待つ事はしなくなっていた。

「そうだ、新しい上司どう？　嫌なやつじゃない？」

豪快な音をたてながら、味噌汁をすする潤が上目でこちらを見ている。

「ああ、城川さん？ 別に、嫌な人じゃないよ。そんなに知らないけど。まだ一ヶ月しか経ってないしね」

潤に隠し事をするのは容易い。潤はあたしのことを、かいがぶっているからだ。

もちろん、やましいことなどひとつも無い。城川さんのそれと同じように、あたしの薬指にも潤と揃いのリングが輝いているし、このリングや潤を裏切ることとは決してしていない。

「そっか。何か嫌な事あれば言えよ。殴りこみに行つてやるから」

自慢げに拳をつくつて言った潤。もしも二年前なら、付き合い始めの頃なら、あたしは満足そうに笑ってお礼を言ったと思う。なのに今は、こんな無邪気な優しさが疎ましかったりする。

「殴りこみに来るんなら言わないよ。会社で問題起こされたら面倒」

そんな言葉に拗ねたのか、ちえつと舌を鳴らして口を尖らせている。こういうところ、まだ子供だなと思うと、さらに不満が押し寄せてきた。

潤の何が好きかと問われれば、あたしは昔と変わらず、真っ直ぐで純粹なところだと胸を張って答えるだろう。自分がとうに見失ったそんな部分が、ひどく羨ましくて、それから、最近では窮屈だったりする。

「潤は？ 大学の卒論進んでるの？」

胸にかかったもやを打ち消そうと、手軽な話題を探す。けどそれは、どうやら失敗したようで。潤はやけに不服そうな表情を作り、ふてぶてしく首を横に振った。はつきり言って可愛くないし、あたしのもやはさらに濃くなってしまった。

「卒業できなくても知らないから」

「わかってるよ。何とかなるし」

その根拠のない自信はどこから来るのか。

溜め息を殺し、あたしは二人分の食器を片付けようと立ち上がった。俺も手伝う、と、未だふてくされたままの潤が隣に並び、やっとな聞こえる程の声で小さく謝罪をもらっていた。

あたしはと言うと、この時も、潤の隣で眠りにつくときも、瞼の裏で城川さんの苦笑いを思い出していた。

月曜日、いつものように出社すると、城川さんが開口一番に言った。

「南、今日の夜空いてる？」

ああ、今日も相変わらず端正な顔だ。瞳いっぱいこの顔を映すだけで、思考回路は停止してしまう。頬に、唇に、触れてみたい。その瞬間を、感触を、想像するだけで、息が詰まる。

「おい、南。朝っぱらからケンカ売ってんのかお前は」

腰を屈め、あたしと同じ視点の位置まで顔を持ってきて、眉間に薄くしわを作った城川さんに胸が音を立てる。幼い乙女にでもなっ

た気分だ。ごくりと喉を鳴らし、息を吸い込んで、それらを隠すようにあたしは大人ぶる。

「売ってません。夜、何かあるんですか？」

彼の次の言葉に期待が湧き上がってくる。会社でなく、二人の空間でこの顔を眺めてしまったら、いよいよあたしは暴走してしまうかもしれない。

「少しでいいから、残業してくんない？ もちろん俺も残るけど、明日までに仕上げてほしい事があるんだ」

期待外れだと、少々残念にも思ったけれど。いつもより長くこの人を眺めていられるのには違いない。

「はい、良いですよ」

ニコリと顔を作って、城川さんの脇をすり抜けた。
助かる！ とあたしに投げかけた彼の言葉に小さく頷いて席に着く。

周りの誰にも知られたくはない。城川さんへ抱くこの気持ちに、あたしは答えなんて求めていないし、潤との関係や城川さんの生活を壊す気など、さらさらなかった。

ただあたしの中で、最近芽生えることのなかったこの初々しい感情を、誰かの非難や噂などのうつとおしい視線で汚されたくなかった。

残業という言葉を真に受けて、てっきりデスクワークだと思い込んでいたあたしは、両手にバケツと雑巾を持って笑う城川さんを見

て、啞然としてしまった。

「大掃除でも始める気ですか」

「あたり。明日さ、偉いさんが来るんだよ。塵ひとつでも見付けたら煩い人だから、って部長が押し付けてくるもんだから。南、掃除得意だろ」

「何情報ですか」

脱力しきっているあたしのそばで、早速上着を脱ぎ、床に手をついて彼はせわしなく体を動かし始めた。ふわり、と彼の動きに合わせて微かに漂った深みのある香り。

「城川さん、香水つけてます？」

仕方なく雑巾に手を伸ばし腰をかめつつ、横目でしっかり彼の姿を捉える。眉の形も、肌の張りも、髪の新さも。直接この手に触れて、確かめてみたい。

二人きりのオフィスは、最低限の音しか生まなくて。鼓動が聞こえてしまいそうだ。

「香水？ ああ、つけてるよ。おっさんは匂いが気になる年頃なんだ」

「それ、笑えないですよ」

相変わらず可愛げのないあたしに、城川さんもまた、相変わらなく苦笑いで眉をしかめていた。

潤なら、素直に落ち込んだかもしれない。ごめんごめん、とあた

しがあやすまで、肩を落としていただろう。

「そついや南の彼氏、大学生なんだって？ 他の女の子たちに聞いたけど。ちゃんと会えてる？」

腕まくりをした白いシャツの下から、逞しい筋肉が見え隠れする。潤とは太さも違うその腕は、どんなふうにあたしを包むだろうか。

「みんなおしゃべりだなあ。どうでも良いことばかり言いふらすんだから」

答えをはぐらかして、城川さんの仕草を真似るように腕まくりをする。できれば、潤の話はしたくなかった。恋人の不満を口にして万が一、城川さんとの関係が何かに変わるのは嫌だった。そんな格好の悪い始まりはご免だ。

あたしが欲しいのは、慰めじゃない。不満を埋めてくれる、潤の代わりでもない。だからと言って、あたしを甘く包む、潤の温かい愛じゃなくて。懐かしい、あの感情。

「いや、俺から聞いたんだ。どうでも良いことじゃなくてね、俺にとっては」

試すような視線を送る城川さんに、妙な期待と、それを否定する言葉が脳内を支配して、すぐに言葉が出ない。

「南？ ごめん、俺。ふざけすぎたか」

何も言わないあたしを覗き込み、伺うようにそう言うってから、彼は得意の苦笑いで、ジョーダンだよ、と足した。それがどこか残念そつに映って、誰の目も無いこの空間で、あたしの感情が暴れ出す。

もしかしたら、この人も同じ事を求めているのかもしれない。薬指のリングに守られ、縛られて。もしそうじゃなかったとしても、あたしは退くつもりなんて、毛頭、無い。

「いえ。謝らないでください」

今度は飾らずに微笑んでみる。城川さんの瞳が一瞬だけ、驚いたように揺れた。あたしはそれから、視線を預けたまま外さない。

「やけに素直だな」

先に城川さんが視線を落とした。もう既に光沢を放つ床を、とりあえず拭いている。そんなふうに見えた。

「城川さん」

蚊の鳴くような声でも、静かすぎるオフィスでは十分に彼に届いただろう。声色に含んだ、あたしの感情までも伝わったかもしれない。無言のまま彼は顔をあげ、初めて見せるような優しい表情であたしを見つめている。

簾が、外れてしまいそうだ。いや、外してしまいたい。

「恋と愛って、どう違うと思います？」

疼き出した衝動を、やっとの思いで抑え込む。

まどろっこしい言葉なんてなくても、手を伸ばせばきっと、簡単に届いたに違いない。だけど。まだ、まだだ。もう少し、この雰囲気
気に溺れていたい。

「答えを聞いて、どうしたいの？」

「どうもしないです。城川さんの答えを、聞きたいだけ」

「恋はときめきで、愛は安心、かな。って、これは俺が求めることだった」

微笑を解かないままの、城川さんの顔が近くなってくる気がする。本当に近づいているのか、それとも気のせいなのか。解らなくなるほど、ゆっくり、ゆっくり。

「あたしも、そう思う」

「ときめき不足？」

こくと頷いたあたしを見て、静かに笑う彼を、飽きもせずに見つめた。瞬きの仕草さえ、あたしの鼓動を奪う。

深い香りが鼻先をかすめ、温かい吐息が髪に触れる。気づけばやつぱり、城川さんの顔はすぐ目の前にあつた。

触れるか、触れないか。その距離に、理性やら常識やらがちらちら顔を出す。すぐ隣りあわせに、互いの欲望が確かに存在する。それが堪らないほどに、胸を鳴らす。

みんなが言う、イケナイコトは。こんなにもあたしを満たしている。

城川さんの手が、優しく髪に触れた。同時に痛く締め付けて暴れだした鼓動と言ひ知れない満足感。その心地よさに目を閉じると、脳裏に潤の笑顔が浮かんで、鈍い痛みを残し、消えていった。

死ぬ程の後悔をすると、解っているのに。あたしは懐かしい胸の高鳴りに、嘘をつく素振りすらせずに、ひとしきり目を閉じて。深い香りの中へと堕ちて行った。

f i n .

（後書き）

純愛支持派の方からは反感買いそうな内容ですが……。お読みいただきありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6266b/>

愛じゃなくて

2010年10月21日21時49分発行